P-2-279 骨・軟骨化生を伴う乳癌の1例

JA山口厚生連小郡総合病院研究検査科3, 山口大学医学部保健学科2

○長田英一(CT)1), 上本京英(CT)3), 三馬英紀(CT)3), 高橋隆夫(MD)2)

【はじめに】今回われわれは、左乳房に発生した骨・軟骨化生を伴った乳癌を経験したので報告する。
【症例】57歳、女性。2009年3月から左乳房外側に腫瘤を触知し、激しい疼痛を認めたため同年6月に当院外科受診。エコー検査ではモザイク状の充実部と多房性の囊状部が混在した巨大腫瘍を認めた。マンモグラフィーはカテゴリ3。胸部X線検査で肺転移とリンパ節転移を施行した。
【観察所見】転移は、多型の細胞が混在在性～大型シート状の結合組織が細胞で豊かに認め、細胞質は淡い青緑でライトグリーンに染まり、核内には明瞭な核小体を認める。また、細胞質の巨大細胞を認める。肉眼を疑う細胞像です。
【組織所見】腫瘍は、出血・壊死を伴って紡錘形の細胞が増殖し、骨・軟骨の形成を散在的に認められた。また、血管に乳管癌（硬癌）の病変が認められた。腋窩リンパ節には乳管癌の転移がみられた。肺部に紡錘形の腫瘍細胞が肉眼的増殖し、肺腺癌への分化傾向を認めた。
【まとめ】本例は骨肉腫成分の肺転移を認め、リンパ節には乳管癌成分の転移がみられた。骨・軟骨化生を伴った乳癌は、術後1年以内に肺、骨、脳への血行性転移を来すことが多く、肉腫成分が転移した場合は予後不良といわれている。

P-2-280 骨・軟骨化生を伴う乳癌の一例

社会保険病院総合病院中央臨床検査部1), 香川大学炎症病理学2), 馬瀬病院2)

○石水屋亮子(CT)1), 小野寺正征(MD)2), 鈴木治子(CT)3), 根田耕一(CT)3), 高義(CT)3), 馬瀬義也(MD)5), 上野正樹(MD)2), 阪本晴彦(MD)2)

【はじめに】骨・軟骨化生を伴う癌は、乳癌の特殊型に分類され稀である。今回我々は骨・軟骨化生を伴う乳癌の一例を経験したので報告する。
【症例】症例は70歳、女性。左乳房に腫瘤を自覚したため、近医受診後左乳房C領域に腫瘤を指摘され、当院を紹介受診した。マンモグラフィー検査にて左C/D部位に石灰化を伴う腫瘍陰影を認めた。超音波検査では24×24×16 mmの境界が明瞭で石灰化や囊胞を有する腫瘍を認めた。超音波下穿刺吸引細胞診にて悪性と診断され、左乳房腫瘍部分切除をした。
【組織所見】腫瘍細胞は巨大細胞を含む大小の円形から多彩な形状を呈し、束状や多核、単核、核型、核質、核縁等より多彩性を認めた。これらの所見より骨・軟骨化生を伴う癌を疑った。術中検体細胞診では部分的に背景に壊死物質を認めた。腫瘍細胞の多彩な形状を呈し、細胞質中心部には黄色調を帯びたライトグリーン染色を呈する細胞などより、骨・軟骨化生を伴う癌として診断された。
【まとめ】細胞診にて腫瘍細胞の多彩な細胞形態では本腫瘍を念頭に組織型推定が必要と思われる。